

論説

秋の農作業安全運動

秋の農作業安全確認運動(9、10月)が始まった。農水省は春に続き、農機の転落・転倒対策を呼びかける。シートベルトとヘルメットを着用し、安全フレーム付きのトラクターで作業する。その基本がおろそかになっている。安全こそ経営の要。いま一度、基本を励行し命を守ろう。

秋の運動に向け関係団体・農機メーカーを交えた同省の推進会議では、農家の安全意識の低さが浮き彫りになった。農作業死亡事故の7割が農機作業中に発生し、その半数は転倒・転落による。トラ

クターで転倒してもシートベルトをしていれば死亡率は8分の1に激減する。現実はどうか。日本農業機械化協会の調査によると、ト

基本守り農機事故防げ

ククターのシートベルト装着率は1割強、ヘルメット着用率は8%に過ぎない。いかに無防備な状態で危険に身をさらしているかが分かる。日頃の慣れに加え、作業性の悪さなどが、装着率の低さに表れている。家族や仲間同士の声

かけ、作業前の点検などを習慣化しよう。また、シートベルトをしていてもフレームを倒したままでは安全域が確保できないので注意が必要だ。シートベルト装着警告装置の普及も急がれる。2025年度から、同装置が安全性検

査項目に入る予定だが、井関農機では新型トラクターに、未装着の場合、乗用車と同様にメーターパネルに警告が表示される装備を採用、安全装備を強化する。ハード、ソフト両面から農作業安全に取り組むクボタで

は、農業者に独自の意識調査を実施。7割近くが「ヒヤリ・ハット」の経験をしながら、日頃からリスクを洗い出し作業改善をルール化しているのはわずか15%だった。「何に取り組むのかが分からない」が半数もあった。

安全意識の低さが、事故の高止まりにつながっている。人為的ミスを前提に、農道など農作業環境の改善、死傷事故を防ぐ農機の改良・開発、スマート農業の普及などは必須だが、まずは安全管理の基

礎。実践研修が欠かせない。農水省が主導して育成した農作業安全指導者は約4300人になるが、研修講師を務めたのは4割にとどまる。指導員の多くは自治体職員やJAの営農指導員だけに、生産部会などに向け積極的な研修指導を求めたい。JA共済

連は、農作業事故を疑似体験できる仮想現実(VR)動画を使った研修を全国のJAで展開。農業系高校生への啓発にも取り組む。意識が変われば行動が変わる。熱中症対策と併せ、農繁期を無事に乗り切ろう。